

18 世紀イギリスに於ける動物への道徳的配慮

- 現代の動物倫理との関係を探る -

藤井 可

はじめに

本稿は、現代の動物倫理議論の源泉であると考えられる、18 世紀イギリスに於ける議論を辿っていくことによって「18 世紀の議論と現代の議論との共通要素」、「18 世紀の議論の中に見出される現代の議論の雛型」、「18 世紀の議論から汲むべき、現代に欠けている要素」という三点をつまびらかにすることを目的としている。動物に対する道徳的配慮を示している議論のうち、現代のものは「動物倫理」という言葉を用いて総括した。18 世紀のものに関しては、「倫理的な議論ではないもの」「大型類人猿等を動物ではなく人間であると規定した上で配慮の対象として論じているもの」「動物については附随的な言及に留められているもの」等が混在している為、「動物倫理」という枠ではなくらず、単に「動物への道徳的配慮に関する議論」と呼ぶこととした。

．現代の動物倫理

先ず、現代の動物に対する態度に関する議論を概観したいと思う。当世では、仏教の影響を受けているアジア諸国のみならず、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニアなどの大部分に於いて、動物への虐待は悪いことだとみなされている。更に、それら欧米諸国に於ける気運は、東洋の思想や日本人の動物観とも相互に影響を与えあっている。例えば、欧米由来の動物愛護思想の流れを受け、一昨年、3R の理念が取り入れられた改正動物愛護法が日本国内で実施された。また、昨年は厚生労働省の所管する実施機関に於ける、動物実験等の実施に関するガイドラインが施行されている。逆に、日本発祥の実験動物慰霊祭が、4 つ目の R 「Remembering」として一部の欧米の研究者らに採用されている¹。民間レベルに於いても、いわゆる「動物愛護運動」は各地で高まりを呈しており、そうした運動のいずれも「動物をかわいがろう」という大義は共通しているように見えるが、その実、「どういった動物を配慮の対象とするのか」「どのような場合に配慮をするのか」「誰の利益を優先させるのか」といった点に於いて、これらの議論の中には様々な思惑が入り乱れている。ここでは、議論の整理を行うことによって、それらの混乱を解きほぐすことをも試みたい。

動物への人間の態度や、動物の立場といった問題を扱うにあたって、「動物倫理」という言葉を核に用いたいところなのだが、動物を扱う独立した倫理の領域としての「動物倫理」というものは、今のところ確立されてはいないようである。殊、日本に於いては「動物倫理」という言葉はまったく定着しておらず、「動物への道徳的配慮を扱う議論」は全て「アニマルライツ（動物権利論）」だと一緒にみなされていたり、仮に「動物倫理」という文言が使用される場合でも、「動物実験の倫理」「実験動物への倫理的配慮」という意味で用いられていることがほとんどである²。欧米に於いて Animal Ethics という言葉が用いられる場合は、日本同様の Research Ethics の一分野としての Animal Ethics、及びもっと包括的な立場の Animal Ethics が入り交じって存在しているようである。後者の定義は、「人間以外の動物の道徳的地位にかんする哲学的議論」³ といったものであり、この立場での議論は、動物権利論や動物福祉の考えを包含しつつ、尚且つ単なるそれらを越えていく思

考を展開しているような印象を受ける⁴。本稿で「動物倫理」と表記する際は、この後者の意味での Animal Ethics を「動物倫理」と訳して用いることとする。

それでは目下、動物倫理はいったい何処で論じられているのかというと、あらかじめ環境倫理の一部として扱われているのが現状である。これは、「人間」対「自然」という対立図式で環境を捉えたときに、文化・社会のなかで生活している人間に比し、動物は自然環境のなかに含まれているという見方に由来する。しかし、そもそもいのちある存在である動物を、同様にいのちある存在である人間とまったく切り離して、単なる「自然環境」のなかの一問題として扱うことには無理があると感じる。⁵ 少なくとも現状に於いては、動物倫理は環境倫理の一部分となっている為、その範疇を用いて述べなくては致し方ないのであろうが、ゆくゆくは環境倫理のみならず、同じくいのちを扱う生命倫理にもまたがり、両者をつなぐひとつの確立した倫理領域として、動物倫理という分野が形成されていくかもしれないと予想している。そして、そこでの議論の方向によって、カテゴライズの仕方は更に流れ動いていくであろう。最終的には、細かい区分がなくなり、一つの生命中心主義的な倫理としての枠組みに到達する可能性も存在する。

次に、20 世紀以降の現代に流布している動物倫理の様々な立場を紹介する。それぞれが最も重視している核は異なるが、今回は敢えて「動物倫理」という枠組みで分類しなおすことを試みた。まず、動物に対する配慮を示す種々の立場・考え方のうち、現在主流となっているものを列挙すると、表 1-1 のようになる。以下、各々の立場についての説明を加える。

表 1-1 現代の動物倫理

動物の保護	}	動物愛護
動物の福祉		
動物の権利（純粋な権利論）	}	動物の権利 (広義)
動物の解放		
生命圏共同体を重視した立場		
生命中心主義的な立場		

動物の保護 (Animal Protection)

中野ら⁶ (1988) によると、動物の保護とは、社会の責任に於いて動物を保護し、愛そうという考え方である。これは「動物を利用することはかわいそう」という感情に由来する。その感情は、おそらく人間の心に存在する根源的なものであって、説得や論理によって解消できるものではない。動物保護の立場では、人間と関わりの深い特定の動物に特別の感情を抱くことが多く、古代エジプトの猫、徳川綱吉治世の犬など、この立場から動物を保護した法規は古くから存在した。

現在では、動物に特化した保護の考え方は、動物の福祉と連携した形で、動物の愛護という考え方に総括されているようだ。そして「動物の保護」という言葉は、人間と関わりの深い特定の動物、即ち実験動物、家畜、コンパニオンアニマル⁷ らに対する思いやりだけに限定されず、野生動物の保護といった広い意味合いでの使用が多く見られるようになっており、動物を含めた「自然」を保護するという考え方に移行しつつあるようである。但し、この自然保護の概念は、後述の生命圏共同体尊重主義や生命中心主義とは異なり、

人類が生存する為に必要な公共の財産である自然環境を守ることに主眼を置いて、守る対象や方法を選択するという、人間中心主義的な立場をとっている⁸。

動物の福祉 (Animal Welfare)

世界動物保護協会 (WSPA⁹) の宣言文では、「福祉とは動物の身体的、行動的、精神的な要求の充足度をいう」と定義されており、動物の福祉とは、動物の立場にたって、彼らの生活の質を高めようという考え方とされている。

中野ら (1988)¹⁰ は、動物福祉という考え方は動物保護の思想が変化して強まったものであり、保護が高い立場から下に向けて手をさしのべることであるのに対し、福祉は相手の立場を認めて対等の立場で手をさしのべることでありとしている。「かわいそう」という感情に依って動物を単に可愛がるのではなく、科学的根拠に基づいて動物の習性や行動を理解した上で、保護する対象とみなそうという考え方になってきたともいえる。

実際に動物福祉の立場を取る人たちは、不必要な殺傷や苦痛を与えることをできる限り避け、動物を飼育する場合はそれぞれの種が本来もっている行動パターンを自由に発現できるように配慮を行うことを目標としている (WSPA)。2003 年、英国農用動物福祉委員会 (FAWC)¹¹ で家畜福祉の目標として生まれ、飼育動物全般にあてはまる理念として広まり、世界獣医師協会 (WVA) や国際獣疫事務局 (OIE) で採択された「5 つの自由」(表 1-2) が、国際的な動物福祉の標準となっている。

表 1-2	「5 つの自由 (the five freedoms)」
	(1) 飢えと渇きからの自由。 (2) 不快からの自由。 (3) 痛み、傷害、病気からの自由。 (4) もっとも正常な行動パターンを発現できる自由。 (5) 恐怖と苦悶からの自由。

「5 つの自由」を野生動物へ限なく適用することが不可能なことから察せられるように、動物の福祉は、人間と関わりの深い特定の動物を主な対象としている。動物の福祉の考え方は、動物への配慮を重視しつつも動物実験を擁護する立場をとっている。日本の動物福祉論者である今村英成¹² は、他の動物種のことにまで配慮するという特性ゆえに人類は他の動物種よりも偉いとし、人間の為の諸科学の進歩には現段階での動物実験は絶対必要だという立場をとっている。しかし、闇雲に実験を行うのをよしとしているわけではなく、動物の福祉をないがしろにしてはいけないと強調している。それは、よい動物の福祉が科学的により実験結果をもたらすからである。このような考え方は、動物福祉論者共通のものである。但し彼らは、1959 年に英国の生理学者 Russel と Burch が提唱した 3R (表 1-3) の考え方を取り入れ、可能であれば、ゆくゆくは代替物による実験へ切り替えていくことが望ましいと考えている。

以上の情報を踏まえると、動物の福祉とは、「人間の利益の為に動物へ強い犠牲を、できるだけ軽減していくこと」且つ「人間の利益の為に、動物へ強い犠牲をできるだけ

軽減していくこと」を目指す立場であると言えるだろう。

表 1-3	「3つのR」
Replacement（代替）	= 動物を利用しない技術への置き換え
Reduction（削減）	= 動物の使用数の削減
Refinement（向上）	= 実験方法の洗練による苦痛の軽減、ケアの改善

動物の愛護

動物の愛護という日本語は、時に Animal Protection のことを指し、時に Animal Welfare のことを指す言葉として柔軟に用いられている。動物の保護と動物の福祉の差は、目線（上からか、同じ高さからか）及び、由来（「かわいそう」という感情からか、科学的根拠からか）の違いだけである。その違いはこの際言及せずに、人間と関わりの深い特定の動物に対して、人間中心主義的立場は保ちつつ、配慮をしていこうという考え方が動物の愛護であるといえよう。動物関連の法規の多くは、動物の愛護の考え方に基づいて組み立てられている。

動物の権利（Animal Rights）

人間がもつ権利を動物にまで拡張しようという形で始まった議論である。すなわちこの議論では、人間という限定された集団の自然権から、自然を構成している各要素の権利、自然全体の権利へと倫理が進化していくものとして捉える。

動物の権利論に於いては、動物は道徳的主体ではないが、独立した固有の価値を有する存在であり、平等な道徳的地位、道徳的権利を持つ存在であるとされている。1892年に『動物の権利』という本を著したソールトの議論¹³では、動物の権利論は地球を普遍的な博愛社会と捉えた人道主義に基づいていると述べられている。ソールトは、人間以外の存在に対して共同体を拡大していく必要があると考えていた。彼にとって、動物の権利論とは、全ての生き物を対象とすることを含めた完全な民主主義の要求であり、同時に、人間を残酷性と不正義から解放するという、人間改善の為の運動であった。ソールトは更に「人間と動物は互恵的な倫理的・政治的関係を持つはずである」と信じているほどの先鋭的な考え方の人間であったが、前述の通り、現在の動物権利論ではそこまでの拡大はみられない。

動物権利論者は、人間は動物に対して親切にする直接の義務と、残酷なことをしない直接の義務を負っていると主張する。そして、模範的な権利の所有者はあくまで個体であるとして、全体論的な考え方を否定する。権利の適用範囲は論者により若干異なっているが、現代の動物権利論者の代表格であるレーガンのように、哺乳類に限定する人が多いようである¹⁴。運動の目的には、科学に於ける動物の利用の全面的廃止、商業的畜産の全面的解体、商業的及びスポーツとしての狩猟の全面的撤廃といったものが含まれる。動物権利論者は、絶滅のおそれのある希少種を救う努力を支持するが、その理由はそれらの動物の個体数が少ないからではなく、彼ら一体一体が固有の価値を持ち、敬意をもって扱われるべき基本的権利を有していると考えからである。反対に、個体数が増え過ぎることが人間にとって不利益になるとみなされる動物であっても、動物権利論の立場からはそれらを人間の都合如何で駆除することは許されない。¹⁵

動物の解放（Animal Liberation）

シンガーが功利主義の立場から提唱した議論である。シンガーは、パーソン（理性的で自己意識のある存在）¹⁶である生き物は生きる権利を持つし、快苦を感じる能力を持つ生き物は平等な配慮を受ける権利を持つとしている。シンガーが苦痛の感覚を道徳的配慮の唯一の指標とするのは、「全ての脊椎動物、とりわけ鳥と哺乳動物の神経組織は基本的に類似している」という事実によってである。従って、無脊椎動物や植物は道徳的配慮の対象から外れる。シンガーの考えをまとめると、動物は表 1-4 に示した三つに分けることができ、各々に対してとるべき道徳的配慮は異なる。

シンガーの動物解放論は綿密に組み立てられており、反論の多くを封じることができるが、厳密な動物権利論者からすると、個体そのものには固有の価値を認めず、それらの持つ感覚に価値があるとするという点が際立ち、動物擁護の思想として物足りなさを感じるやもしれない¹⁷。生命圏共同体を重視する立場などからは、シンガーが配慮の対象外とみなした昆虫や牡蠣より下等であるような動物や植物¹⁸、或いは生態系全体に対する配慮を欠いてよいのかという批判も存在する¹⁹。逆手にとって考えると、動物の権利論は言うなれば「博愛精神」という直感的なものから生じている為に、反対者に向かって理論武装することが難しい。その状況を憂い、植物などはさておき、とにかく動物に対する配慮を位置づける為に功利主義を用いて武装を試みたのが、動物解放論であるのかもしれない。

表 1-4 シンガーによる分類²⁰

<p>パーソン（人格）…類人猿、イルカ、鯨など。人間もここに含まれる。</p> <p>彼らは理性的で自己意識を持つ存在であり、自己自身を過去と未来を持った独自の实体であると考えている。故に彼らは生き続けたいという欲求を持ち得る。よって、パーソンは生命への権利を持ち得る。</p>
<p>快苦の感覚を持つが、パーソンでないもの…犬、猫、豚、アザラシ、熊、蓄牛、羊など。</p> <p>彼らは自己意識を持っていないため生命への権利は持たず、代替可能な存在であるとみなされる。但し、平等な配慮を受ける権利は持つ。</p>
<p>自己意識も感覚もないもの…軟体動物、昆虫など</p> <p>彼らには感覚能力がないので、平等な配慮の範疇外の実在となる。</p>

生命圏共同体を重視した立場

（Biological Community, Ecology, Land Ethic, Environmental Ethics）

キャリコットら²¹が提唱した議論で、原子論的な権利論から発展した動物の権利とは異なり、全体論的共同体主義に源を置く考え方である。キャリコットはレオポルド²²の提唱したランド・エシックを全体論的な環境倫理学として再興していこうと試みている。ランド・エシックとは、土地という生命圏共同体を重視し、それに対する影響効果によって各々の倫理的質を決めていこうという考え方である。ランド・エシックの立場では、様々な存在の相互作用に着目して、世界をひとつのものとして捉えるという生態学的な視点が採用され、道徳的価値をはかり正誤を分ける究極の尺度は、生命圏共同体の利益に資するかどうかであるとする。全体としての土地に主要な関心を持ち、各構成要素には付随的な関

心しか持たない。²³

このような考え方を継承した生命圏共同体重視の立場では、動物に対して特別な関心を寄せた議論というものは行われず、動物の生命はあくまで生態系のバランスに資するように相対的に扱われる。絶滅危惧種は生態系の多様性保持の為に保護の対象となるが、個体数が増えすぎることによって生態系のバランスを崩しているような生き物は駆除の対象となる。守られるべきは、全体の生態系、そしてそれを構成する多様な「種」であり、「個体」ではないとされる。これに対して、動物権利論者のレーガンは、生命圏共同体主義は情緒的な意味合いを持つ反面、個体の権利を重視しない「環境ファシズム」であるとして反発している。²⁴

生命中心主義的な立場（Biocentrism）

この立場の提唱者としては、テイラーなどが挙げられる。生命中心的自然観の核をなす信念としては、次の四つが挙げられている。

他の生物と同じ意味合いと条件のもとで、人間は地球の生物共同体の一員を成す。他のすべての生物種同様、人間という種は相互依存のシステムのなかの不可欠な要素である。そのシステムのなかでは各生物の生存は、豊かにあるいは貧しく暮らす可能性同様に、まわりをとりまく環境の物理的条件だけでなく他の生物との関係によっても決定される。

各々がそれぞれの方法でそれぞれの幸福を追求するという意味で、すべての生物は生命の目的論的中心をなす。

人間は他の生物に本質的に勝っているわけではない。

テイラーは、自然を尊重するという姿勢を理解可能なものにし、正当性を与えていく信念体系が、生命中心主義的な見地であるとしている。この立場に於ける自然への道徳的配慮は、人間の道徳的思考や判断の特異性を前提になりたっているものであり、つまり、人間と他の種との根本的相違を前提としていることになる。人間も含めた全ての生命存在の幸福を、人間の思考や判断をもって尊重しようとする限りに於いて、当然この立場は完全な人間非中心主義とはいえない。しかし、尊重される価値や配慮の対象が、人間だけに限られていないことから、人間中心主義でもないと思われる。価値の中心に人間を置くかそれ以外のものを置くかという二者択一に拘泥せず²⁵、全ての生物を視野に入れているということから、やはりこの立場は「生命中心主義」としか呼びようがない。人間は、他の生き物を上回る思考力や判断力を手に入れた故に、他の生き物の優位に立って当然であるとするのではなく、その思考力と判断力を用いて他の生き物へ配慮をするというより重い荷を負ったのであると考え、自らの生命の為に他者の生命の為に奉仕すべきなのである。

ここまで、現代の動物倫理に関する議論の主だったものを整理して紹介した。これらの考え方の多くは、18世紀イギリスに端を発している。節で、こののはじまりとなった18世紀イギリスでの動物への道徳的配慮の議論を顧みて、現代の議論の源泉を辿ってみたいと思う。その前に次節では、それら18世紀の議論の背景にある、近代イギリス周辺部の自

然観の変遷を追っていくことにする。

・近代イギリスに於ける自然観 及び 動物の位置づけ

ここでは、動物への道徳的配慮に関する 18 世紀イギリスの議論の背景にある、当時の人々の抱いていた自然観と、それに基づく動物の位置づけを中心として、それらの変化を支えた経済と産業の発展、科学と技術の発達、また、全ての土台に存在していた宗教観などの諸要素について探ってみる。まずは、イギリスには元々どのような自然観が存在していたのか、そしてその中で動物はどのように位置づけられていたのかを概観した上で、近代イギリスの自然観に触れていきたい。

中世イギリスの自然観

中世イギリスに於いては、キリスト教神学の道徳的基盤に基づいた考え方が正統であるとされていた。チューダー朝、スチュアート朝のイギリスには、「世界は人間の為につくられ、ほかの動植物は人間の欲求や必要に服従すべきだ」という既成観念が元々在ったのだが、更にこの臆断を正当化する為に件のキリスト教が利用された。『旧約聖書』特に「創世記」の偏った解釈のもと、一切の自然物は人間の利益と楽しみの為に神によって創られたものであり、人間はそれらの支配権を持つという、人間中心主義的な精神が浸透した²⁶。トマス(1989)の指摘によると、『旧約聖書』には神の創造物たるほかの生き物に対して人間は責任を持って行動すべきだと示唆した箇所がいくつかあるが、イギリスの神学者たちはそれらをなおざりにしがちだったようである。原初のキリスト教自体が本質的に人間中心主義的であったのかはさておき、当時の神学者の偏頗な解釈によって、人間中心主義的な自然観が確立したのは確かである。動物への不必要な残虐行為は、その行為自体が不正とみなされることはなく、人間に対する残虐性を助長する傾向があるという懸念に基づいて、非難の対象となった。²⁷

西洋社会の文明は、食物、衣服、輸送力、労働力としての動物資源に高度に依存することによって発展を遂げており、中でもイギリスに於ける動物資源への依存は抜きん出ている²⁸。動物以外の代替資源を見出せない状況下で、動物利用と切っても切れない文化を構築してきたイギリス人たちが自分たちの文化レベルを低下させることなく生き続ける為に動物利用を正当化する人間中心主義を打ち立てたのは、尤もなことであったといえるかもしれない。

中世ヨーロッパに於いて、自然界のヒエラルキーは次のように考えられていた。²⁹

図 2-1

動物	人間	天使
【より不完全な存在】		【より完全な存在】

さらに動物は、食用 / 非食用³⁰、野生 / 馴化³¹、有用 / 無用 さらに美 / 醜によって、正負の価値を付与され、分類されていた³²。すなわち、動物は自然界のヒエラルキーで人間の下に位置づけられたのみならず、その動物組織の内部にも、人間の目からみた価値によって順位づけられた階級が見出されたのである。その動物界内部の階層性は、人間の社会的な階層性のシステムと相互に強化しあっていた。こうしたヒエラルキーは、自然界に於

ける人間の優位性を示すものであると同時に、人間界のヒエラルキー的な社会秩序を表象し、説明し、正当化するものであった。また、自然界に人間社会から抽出したカテゴリーや価値を投影するということもよく行われていた。³³

中世イギリスでは、動物と人間を分かち特性として、先ず「言語」が強調された。続く特性として「理性」が挙げられるが、動物との相違は種差的なものなのか、程度の差なのかについては議論がわかれていた。多くの人々は、動物にも初歩的な理解力はあるものの、それは人間よりはひどく劣っていると考えていた。人間には優れた理知にもとづいた選択能力があるが、ほかの動物は本能に制限されているので自由意志を持つことができないとされていた。これを受けて三つめに挙げられた特性が「宗教」であった。当時のキリスト教世界では、「動物と違って、人間は良心と宗教的本能を持ち不滅の魂を持っている」と考えられており、人間の靈魂と動物の魂との間に根本的な差異を示すことで、人間本性の威厳を保っていた。³⁴

この考え方を、定式化された学説として発展させ流布したのが、デカルトである。デカルトは1630年以降、「人間以外の動物は魂、意識、感覚を持たず、神の創った単なる自動機械に過ぎない」といういわゆる動物機械論を発展させた。この学説がヨーロッパの人々の自然観に与えた影響は大きく、動物機械論の支持は、人々がためらわずに動物を操作し利用する道具として扱うことを正当化した。もっとも、デカルト自身は晩年にこの学説を修正したようであるが、本人の意図を超えてこの学説は後世まで影響を与えることとなり、これを機に動物の地位は底まで落ちることとなった。但し、イギリスでもデカルトの著作は流布したにも関わらず、イギリス知識人たちは他のヨーロッパの知識人たちほどには動物機械論を擁護しなかった。デカルトに対する当時のイギリスの代表的意見は、「動物機械論は非常に危険だ」というものであり、おおかたのイギリス知識人は、動物機械論全体が、感覚や理性の明証に反し、人類の常識に背くと感じていた。³⁵

また、それまでの哲学者は、信仰や啓示からのみ来る知識の扱いを保留していたが、デカルトは神の存在証明を行ったうえで、現実の宇宙を物理的な部分と道徳的な部分とに分割した。デカルトは、延長と運動だけが「一次的」な物理的実在であり、存在のほかの諸面、例えば色・味・匂いなどは「二次的」性質として取り扱われ、さらにこれらのかなたに、物理学ではますます近づきたい領域、すなわち感情、意志、愛、信仰などの領域が存在するとした。科学は、測定可能な「一次的」なものと、ある程度の「二次的」な事象を取り扱うが、三つめの領域には全く関与しないとした。デカルトの物理学の見解からすると、人間の身体も動物と同じく、それ自体は単なる機械であった。純粋な機械としての人体と、その中に宿っている魂とは何かつながりがあるにはちががなく、デカルト自身はそのつながりは松果体に存在すると考えていたが、魂自体の領域は物理学の扱う範疇の外であるとして、巧妙にその議論を避けることに成功した。更に、続くニュートンは、神は宇宙を創造し始動するのに手を下し、体系の安定性を維持するのに若干関与しているのみで、実際の運営は単純な数学的法則にのっとって行われているという動的な宇宙観を打ち立てた³⁶。デカルト、ニュートン両者によって、自然科学とキリスト教との穏便な棲み分けが可能となった。

近代イギリスでの動物の位置づけ

近代イギリスでは、前述のキリスト教的人間中心主義が存在する一方で、それらの古い信念への攻撃も行われた。16世紀以降にペット飼育が一般化した結果、動物にも知性や特性があるという主張がなされるようになってきていたが³⁷、そうした背景を踏まえて、近代初頭の科学者や知識人たちは、動物と人間との間の境界線をつぎつぎと破壊していった。その主張のひとつは、「人間は道徳的に動物と同程度か、あるいはそれ以下かもしれない」というものであり、もうひとつは「知的にみると動物は殆んど人間に等しい」というものであった。

ルネサンスを経て獲得された新しい自然科学のものの見方は、それまで知られていなかった数々の生物学的発見をもたらし、それが転じて新しい道徳的判断をも生み出すこととなった。そもそもは産業革命前後に、天然資源の発見や、医学的発見、農業への貢献をあてこんだ、人間による自然支配・自然利用の為の学問として復興した生物学が発展するにつれ³⁸、人間と動物の肉体構造の類似が解剖学的に暴露されるに至った。科学者でなくとも、例えば畜産業に携わる者は、人間の死体も動物の死体も等しく腐敗することを経験的によく承知していた³⁹。植物の分類法を確立し、生物学システムの相互連鎖を発見したリンネは、人間を動物の中に含めて分類しようとも試みていた⁴⁰。動物の分類法はすでにアリストテレスがつくっていたが、18世紀までには外的な構造ではなく内的な解剖学的構造が次第に注目されるようになった。リンネのシステムを手本とした動物の分類様式が本格的に確立したのは、19世紀になってからであったが、それ以前から、旧来の人間の鏡像としての動物観に異を唱える者はあらわれはじめていた。動物を美醜によって区別する見方も時代遅れとなり、18世紀の新古典主義期には、神のデザインに対する信頼の厚さから、蛇や野獣、毒虫といった生物も、自然美を伺わせるものだと考えられるようになっていた⁴¹。「存在の連鎖」⁴²の理念は、人間と動物の類似性が解剖学的に判明したことを受けて再興し、18世紀に最盛期を迎えた。「存在の連鎖」は、一見、人間の優位性を強く示しているようにみえるのだが、この連鎖には切れ目がない為、この概念を支持すればするほど、人間と動物の間の境界線は一層不鮮明になっていくのであった。

17-18世紀イギリスに於ける動物への道徳的配慮の議論では、社会、文化、経済、産業、学問などの変化や発展を背景に、デカルトの動物機械論、自然界のヒエラルキーなどのキリスト教に基づいた人間中心主義を再考し、批判することが主な争点となった。勿論、こうした新しい見解は旧体制からの反撃を受けることになったのだが、再現可能性をもった自然科学と結びついた新しい考え方はそれでも滅びようがなく、18世紀末には人間の無比性を説く旧来の正統学説を弱体化させていくこととなった。その結果、人間中心主義的な伝統に則った自然観は揺らぎ、「世界が人間の為にだけ存在するのではない」という人間非中心主義的見解が受け入れられ始めることとなった。但し、多くの者にとってキリスト教への信仰が薄れたわけではなく、神の設計の絶対的な信頼というものは継続していくこととなった。また、18世紀に人間非中心主義の芽があらわれたのは確かであるが、それがキリスト教的人間中心主義に取って代わった唯一の標準として君臨したわけではなく、人間中心主義と人間非中心主義の闘ぎあいは幾度も繰り返されながら、現代の議論の中にも至っている。

・ 18 世紀イギリスに於ける動物への道徳的配慮

18 世紀イギリスでは、節で追った時代背景のもと、既存の階級社会と新しい学識とが溶け合って、この時代特有の自然観とそれに基づく動物観が形成されていった。人々の動物観を複雑化させた因子としては、更に、何を善しとするかという統一規範の不在と、階級毎の意識の相違が挙げられる。前者は、前時代では人々の思想の強固な基盤となっていた、キリスト教を利用した人間中心主義が揺らぎ始めていたことに由来すると考えられる。後者に関して、以下に簡単にまとめる。

・ 下層階級の動物観

動物と直に接する機会の多い下層階級の人々は、家畜を人間共同体の従属的な一員として捉えていた。彼らは、教えさえすれば動物が多く複雑な作業もこなせることを知っており、知識人たちが動物の理性を力説するまでもなく、その存在を経験的に承知していた。但し、彼らにとって、動物は労働力または資金源であった為、大方の者は動物に対して感情移入をせず、あくまで実利的な見方をとり続け、動物に親切にすることは裕福な者だけが行うことができる贅沢だと考えていた。また、彼らは上層階級の野外スポーツを羨望の眼差しで見えており、あわよくば自分たちも下等動物に対する優越権に預かりたいと思い、それが叶わぬ状況に不満を抱いていた。家畜以外の動物に関しても、人間と植物や野獣とは、一つの大きな共同体の中で緊密に結ばれているというのが民衆の態度の前提となっていた。⁴³

・ 中流階級知識人の動物観

中流階級の人々は、上流階級、下層階級の各々の動物への態度に対する嫌悪観を抱いていた。对上流階級としては、狩などの好戦的な貴族的伝統への嫌悪、対下層階級としては、動物に対して実利的な見方をとる習慣への嫌悪が挙げられる。この範疇の人々の中から、動物への思いやりの必要性を主張する「感受性のすぐれた人」が現れた。こうした人の多くは、裕福な都会人か、教養ある田舎の聖職者だった。彼らは農作業に従事していなかったため、動物を労働用の家畜としてではなくペットとしてみなしており、その感性は、下層階級の人々とは異なるものであったようだ。⁴⁴

・ 上流階級・中流階級の一部の動物観

社会の上層の人々にとって、狩や闘鶏などのスポーツは高貴で英雄的な娯楽であり、脈々と受け継がれてきた貴族の階級的特権と結びついた重要な権利であった為、彼らはこの権利を人間や動物の権利を説く急進的革命派から守る必要があると考え、その独占に躍起になった。彼らは、動物の為ではなく自分たちの楽しみと権益保護の為に、狩猟用の動物の保護をすすめた。同様に、自分たちの利益の為に、例えば慈悲深い調馬法や、食用動物の自由な放牧と速やかな屠殺を推進した。それは経験的に明らかになっていた、思いやりをもって調教された馬の経済的価値の高さ故、また、健康で清潔な生活を送り、ひとおもしろに殺された動物の肉質の高さ故であった。こうした支配者階級の利己心こそが、既に成立していた動物愛護法(1641 年制定)の構成因子であった。また、考古学、地質学、博物学、生物学といった自然科学の成果を受け人間と動物の絶対的相違は見出せなくなった結果、傷つけられそうになった自分たちの誇りを守る新たな手段として、18 世紀末には「人種主義」が出現した。多くの者が、自分たちの種族、即ちヨーロッパ白人の優越性を保つ為に、「種差別主義」から「人種主義」へと翻り、これが次世紀の民族主義へと発展していった

と考えられる。⁴⁵

万人に被造物の支配権が与えられていると主張する下層階級の人々と、下等な被造物に対する人間の権利は特権集団にのみ限られるべきだと信じる上流階級の人々は当然反目しあっていた。加えて、中流階級知識人の一部のように動物に対する道徳的配慮を主張する者もあり、論争は三つ巴の様相を呈していた。以上の背景を踏まえた上で、本稿に於いて考察するのは、18 世紀イギリスに於ける「中流階級知識人」での議論であることをここに明言しておく。

本節で主に参照するテキストは、ギャレットが 2000 年にまとめた『18 世紀に於ける動物の権利と動物の魂について』(*Animal Rights and Souls in the Eighteenth Century* 6 Volumes, Boston: Thoemmes Press) という論文集に収められているものである。この論文集は、ベンサム功利主義に至るまでの 18 世紀初頭から 19 世紀までにかけて行われた、「人道にかなった動物の扱い」にかんする議論の中の「最も面白い幾つか」を紹介すると共に、これらの議論により広い文脈を与えることを目的として編まれたものである。ギャレットは序文冒頭で、ベンサムの『道徳及び立法の諸原理序説』(*The Principles of Morals and Legislation.*) の脚注の一部を紹介している。

足の本数・皮膚の被毛・仙骨末端部は、感覚を持つものを同様の運命に委ねる理由としては不十分であるということが、いつか認められるかもしれない。…問うべきことは、彼らは理性的にふるまえるのか、彼らは話すことができるのか、ということではなく、彼らは苦しむことができるのか、ということなのである。⁴⁶

ギャレットは「ベンサムの脚注の熱烈さは、人々をびっくりさせるものではあったが、全くの無から突然現れてきたものではなかった」と述べ、多くのイギリスの論者たちが、ベンサムの議論より前に、宗教、自然法、および実践的考察をまじえて、人道にかなった動物の取り扱いについて論じてきたことを示唆している。

『18 世紀に於ける動物の権利と動物の魂』に収められている著者たちの動物に対する道徳的配慮の議論、及び、それらの議論に相互に影響を与えあった幾人かの同時代の哲学者たちの動物に対する議論を読み解いた結果、彼らの動物への道徳的態度の特徴として「神学に基づいた動物への態度」「動物のもつ特徴から発する動物への態度」「神学に基づかない動物への態度」という三つが浮かび上がってきた。以下、各々についての解説を加える。

神学に基づいた動物への態度

・ 神の存在の重視

デカルト、ニュートンによって宗教と自然科学が分離して以来、動物の扱いにかんして論じる際にも「神」という概念は次第に用いられなくなっていくのだが、これら 17-18 世紀の議論は、その過渡期となる時分に行われたものであった。また、トマスの解釈によると、不必要な動物虐待に反対する運動は、経済や産業の発展といった社会変化によるところが大きいのは勿論であるが、その知的起源の一部を担っていたのは、人間が神の創造物の世話をするべきだというキリスト教に於ける少数派の伝統から芽生えたものにほかならない⁴⁷。

よって、動物への道徳的態度を主張する初期の論者の多くを聖職者が占め、また、そこで神という概念が重視されていたのは然るべきであったといえるだろう。ブジャン神父やヒルドロップは聖職者であったし、特にブジャン神父は伝統的なキリスト教の枠組みから逸脱しないように配慮しつつ、動物に対する新しい考え方を展開していった⁴⁸。またジェニンズは聖職者ではなかったが、自身の議論の目的は、神に対して完全に服従するように人々を説得することであると宣言している⁴⁹。また、聖職者ではないオズワルドも、旧約聖書の逸話を用いて一部の議論を展開している。⁵⁰

現代の動物倫理の中心的議論では神という概念を中心に据えたものは少ない。しかし、キリスト教聖職者らによる議論に於いては、スチュワード精神⁵¹としてこれらの概念は息づいているようだ。

・ 存在の連鎖

存在の連鎖とは、ポーブ、プリマット、そしてジェニンズらが用いている概念である。彼らより少し前の世代となるライブニッツの『モノドロジー』の考え方にも、これに近いものがある。もともとはプラトンやアリストテレスの学派が最初に体系化したものであるが、18世紀に最も広がり受け入れられることとなった。存在の連鎖の概念は、人間以外の被造物は人類の為の手段であるという中世までのスコラ哲学の仮説に、強力に反対する作用をもっていた。そしてこの概念に於いては、宇宙はあらゆる可能的な形態の存在が各々の特性に従って自らを表す為に創造されたと考えられていた。しかしこれはキリスト教の神による世界の創造を否定するものではなく、人間を頂点とする世界観から、人間を無より神への中点の際立った存在として謙虚に捉えなおす枠組みへの転換なのであった。⁵²

存在の連鎖は、無生物から植物、動物、人間、そして天使へ続く、一種のスライディング・スケール・モデルである。存在の連鎖の議論が白熱したのはダーウィンの進化論が登場する以前である為、それは系統発生的なスケールとは異なるものの、翻せば、存在の連鎖という土壌があったからこそダーウィンの進化論が世に受け入れられたのだとも言えるだろう。

「存在の連鎖」の概念の受容によって、人間と動物はまったく異なるものだというこれまでのパラダイムから、無機質 - 植物 - 動物 - 人間はひとつづきの同じシステムの中にあるのだという見解への移行が始まったのであろうが、同時に、システム内での階層の上下が強調されることとなり、結果ジェニンズらの意図を越えて、人間の中にも上位・下位の階層が存在するという意識が顕著になっていったと推察できる。このことが、19世紀以降の人種主義を後押しすることにもつながったのではないかと考えられる。

・ 東洋の宗教への関心

かつてヨーロッパでは、人類に害悪をもたらしたものとしてヒンドゥー教が有名になったが、この時代には、植民地政策によって前時代よりも東洋が身近な存在となり、その結果、東洋への困惑⁵³のみならず、憧憬や礼賛⁵⁴も起こり始めていた。自身もヒンドゥー教徒であったオズワルドは、アジア、特にインドのヒンドゥー教徒の考え方や習慣を紹介している。オズワルドは、まもなくヨーロッパの人々はヒンドゥーの立法家こそ真の立法家としてみなすようになるだろうと述べ、ヒンドゥーの教えと対比させながら、当時のヨー

ロップ人が信じていた教義の残忍さを指摘した⁵⁵。またベンサムも、イスラムやヒンドゥーの人々の動物への配慮を賞するような記述をしている。⁵⁶

これは、現代のディープ・エコロジー思想⁵⁷などに於ける東洋礼賛に通ずるかもしれない。この傾向に対して、インドのグーハは、ディープ・エコロジーに収斂しているものとして東洋哲学が絶えず言及されていることについての批判的見解を述べている。ヒンドゥー教、仏教、道教などの各々の宗教的伝統は複雑で、内部的には区別されているものであるにも関わらず、ディープ・エコロジーでは、生命中心主義的自然観をもつものとしてひとまとめに括られている。グーハは、こうしたディープ・エコロジストによる東洋伝統の読み方は、宗教的・文化的伝統の差異に目を向ける努力を怠ったつまみ食いの的なものであって、それは歴史的記録に対するかなりの歪曲であると述べている。また、「東洋」に於ける人間活動の特徴的形態は、意識的でダイナミックな自然の操作であったことを指摘している。「東洋」に於ける多くの農耕社会は自然環境にかんして高度な知識をもっており、その知識は体系化された科学的知識に匹敵、ときに凌駕するものであるのだが、グーハは、そのような伝統的生態学的知識の形成が、ディープ・エコロジーが言う自然との神秘的な親和性によるものであるとはとても言い切れないとしている。ディープ・エコロジーやオリエンタリズムといった「他者」としての東洋を礼賛する思想家にとって、東洋は西洋を投影する媒体、願望を映し出す鏡像に過ぎないと述べている。⁵⁸

件のオズワルドは、自身もヒンドゥー教に改宗するほど徹底した人物であったのだが、彼の影響を受けた者など、伝聞によって東洋への憧憬を抱いた人々までもが、ヒンドゥーの教義の真髄を理解していたとは考え難い。彼らもまた、グーハが批判するディープ・エコロジー同様、自分たちを映す鏡として東洋思想を利用していたのに過ぎないのかもしれない。少なくとも、東洋の影響を頻繁に受け取れるようになったということが、この時代に新たに生じた特徴であったとはいえるだろう。

動物のもつ特徴から発する動物への態度

・ 言語、理性

ブジャン神父⁵⁹やヒルドロップ⁶⁰、ヒューム⁶¹、ホワイ特⁶²らは動物の感情、感性、理性の存在を肯定しており、更にブジャン神父⁶³、ヒルドロップ⁶⁴、ホワイ特⁶⁵は動物の言語の存在も肯定している。彼らは動物の動作や鳴き声を通じてのやり取りを、「言語」を用いた「会話」であると解釈した。これに対して、ルソーの影響を受けていたモンボッドー卿は、言語を人間が用いる音声言語に限定した上で、人間であることと言語の使用とは無関係であると考え、言語を持たない高次の霊長類も人間と同種の生き物であるとみなしていた⁶⁶。

人類学的知見から検証を試みようとするならば、音声言語としての言語が、人間であることと無関係であるというモンボッドー卿の考えは、おそらく正しかったといえよう。類人猿とヒトの共通の祖先から、ヒトの祖先が分離したのは今から約 450 万年前、さらに人属(ホモ)が現れたのは約 200 万年前であるとされるが、その時点では人属は音声言語を所持していなかった。ホモ・サピエンスの咽頭喉頭が完成し、音声言語取得に至ったのは今から約 10 万年前であると推定されている。音声言語は肉体と密着している為、発されたことばは、時間(いま)・空間(ここ)に束縛されていた。人間が文字言語を取得したのはせいぜい 6 千年前のことであり、それによってようやく人間は、肉体に課せられているいま・

ここという制限を超えることが可能な、概念言語⁶⁷を手に入れたのだと考えられている。⁶⁸

言語を現生人類の使用する音声言語に限らないというブジャン神父らの枠組みをとった場合も考察してみる。音声言語をもっていなかった 200 万年前のホモ・ハビリスの脳にも、ブローカ野（運動性言語野）が発達していたとする研究報告がある。類人猿は初期人類同様、話す為の発声器官をもっていないが、彼らが言語の認知的基盤をもっているとする研究結果もいくつか報告されている。また、言語獲得のパターンとしては、人間の音声言語の学習と鳥が鳴き声を学習する過程との類似性と、それを支配する脳の領域の類似性が挙げられている⁶⁹。人間の用いる言語から拡張した概念としての動物の言語ではなく、それぞれの生態に応じた情報伝達方法として様々な形態の「言語」が存在すると捉えてみれば、ブジャン神父らの考えも正しいといえるのではないだろうか。すなわち、これらの議論に於ける「音声言語の有無は人間であることと関係ない」または「動物も言葉を持っている可能性がある」という考えは、どちらも正しい直感であったのだといえよう。

更にブジャン神父は、ゆくゆくは動物のことばを解読して欲しいという望みを読者に託したが⁷⁰、ヒルドロップは人間が動物のことばを理解できるようにはならないと考えていたようだ⁷¹。また、ホワイトは、鳥の鳴き声などが互いの情報伝達に用いられていると判断したものの、それらを人間のことばに翻訳しようとしたり道徳的意味を持たせようとしたりはせずに、あくまで自然科学的な視点での観察に終始している。

本能については、ブジャン神父⁷²やヒルドロップ⁷³、ヒューム⁷⁴はそれを動物のみに付与することには否定的である。ヒュームは、理知とは本能的機能にほかならないと述べている。ジェニンスは、本能は動物の段階で付加的に与えられた資質であり、人間はそれに加えて理性をもつとしている⁷⁵。本能は動物に、理性は人間に与えられた特性であると考えていたのが、ルソー⁷⁶やホワイト⁷⁷であった。ルソーは理性の優越性をほのめかしているが、ホワイトは、本能を理性の下にも上にも置くことなく評価している。思うにホワイトは、人間は理性によって動き、対して動物は本能によって動く別種の生き物ではあると考えてはいたものの、その枠組みにそれ以上の道徳的価値を与えることはなく、観たものを観たまま受け取るという自然科学的視点を貫いていたのだらうと考えられる。

・ 類人猿 = 人間説

ルソーは、オランウータンやゴリラなどの類人猿を、太古のままの人間だと考えた⁷⁸。その影響下にあったモンボッドー卿も、類人猿は人間と同等の道徳性と社会性をもつ存在だと考えていた。これらは、原生自然を探索した人々が仕入れてきた目新しい情報に基づいた議論であった。捉え方は様々だが、「類人猿 = 人間」「類人猿 人間」「人間 = 類人猿 = 動物」のいずれにせよ、人間と、元々動物とみなされていた類人猿とを同一視するような議論が出現したということは、非常に衝撃的な出来事だったのではないかと推測される。更に「存在の連鎖」同様、この「類人猿 = 人間」説も、存在の連鎖の概念同様にダーウィニズムの受容へとつながる土壌形成の一端を担っていたと考えられる。

・ 魂（死後生）

元々、キリスト教の世界観では、人間だけが不滅の魂を持っていると考えられていた。動物の魂に関しては、同じくキリスト教的世界観に基づいた「動物には悪魔由来の可滅的

な魂が与えられている」という考え方や、動物機械論に依る「動物は魂を持たない単なる機械に過ぎないと」という考え方が、18世紀の主流であった。ブジャン神父は「動物は人間的一种であるべきだ、もしくは、人間は動物の一种であるべきだ」と考えており、デカルト主義には反対していた⁷⁹。しかしながら、聖職者である彼は伝統的キリスト教との軋轢を避けねばならず、よって、動物の魂は悪魔由来だとして動物の死後生の存在を否定した⁸⁰。これに対して、ヒルドロップやディーンは動物の死後生を擁護している⁸¹。また、ライブニッツは、知覚や魂を持つが理性を持たない「動物のモナド」と、意識的精神や理性、知識を持つ「人間（的）モナド」を区別しており、動物の場合は魂の転生は断じてないとしている。⁸²

死後生の概念は、神学的な議論から派生している。その見解は論者によって分かれるものの、「自己意識」ではなくて「魂」の有無を問うているところが、この時代の議論の特徴であると考えられる。

・ 快苦

ブジャン神父やヒルドロップ、ヒューム、ホワイトラは、動物の感情・感覚の存在を肯定している。その中でもヒュームは、人間に理性や情緒がある以上、人間と似通っている動物にもそれらがあると考えることが論理的であると理論づけた。ルソーは動物の理性の存在は認めぬものの、感性の存在は認めており、そのことが少なくとも動物が人間によって不必要に虐待されないという権利を動物に与えているはずであるとしている⁸³。ポーブ、プリマット、ジェニンズらは、動物が快苦の感覚を持つことを認め、それゆえに動物は道徳的配慮の対象であると考えていた。これらは当時主流派だった動物機械論と対立する見解であった。

ジェニンズは、全体の快を増進する為には個人の苦が必要な場合があるとしており⁸⁴、これは現代のシンガーの功利主義論者に通ずる先鋭的な考え方であったといえる。実際に、ジェニンズ、プリマット、ポーブらによって展開された、快苦の感覚の有無に基づく動物虐待反対論は、シンガーがたびたび引用するベンサム議論に影響を与えたようである。

神学に基づかない動物への態度

・ 愛（動物保護的観点）

ブジャン神父とヒルドロップは、コンパニオンアニマルや小鳥にかんする描写を多用しており、そこには繰り返し「Love」という単語が使われている。それは人間から動物へ向けての愛であり、また、人間と動物相互の愛を指している場合もある。また、ヒュームは、共感という概念を適用させて、動物と人間の相似性を見出した。オズワルドやジェニンズは、人間の残虐性を非難し、動物に対する人間の慈悲、憐れみ、思いやりの大切さを説いている。ギャレットが指摘するように、これらは感情に基を置いた議論であり、故に現代の動物保護の源流といえるのではないだろうか。

産業革命の影響で自然資源の探索が進められ、原生自然への介入も始まったとはいえ、これの思想家たちが野生動物について直に知る手立てがあるはずもなく、彼らが「動物」について考えるときの対象は、コンパニオンアニマルやわずかに伝え聞いた野生動物の情報に限られるという制限があった。これが、彼らの議論が動物の保護に留まった理由であ

ろう。これに対し、ギルバート・ホワイトは、その著書に於いてセルボーンのある自然の生態を観察した結果を詳細に記しており、彼の動物に関する実際の知識は上記の思想家たちを遥かに凌ぐものであったことが容易に推測される。もし、この自然科学的な観察に基づいて動物に対する態度を決定するのであれば、それは動物の福祉に類似したものとして成立するのではないかと期待できるが、しかし彼は、観察された生態にそれ以上の道徳的価値を与えることはあまりなく、観たものを観たまま受け取るという態度を貫いていたようだ。ホワイトのような自然愛好家や博物学者たちが叙述した自然の見たままの情景に、他の思想家たちが価値判断を加え、保護なり、福祉なり、功利主義なり、各々の動物への道徳的態様の枠組みの、或いは非道徳的態様の枠組みの裏付けに用いたのだと考えられる。

・ 経験に基づいた解釈（動物福祉的観点）

オズワルドはベジタリアンであったが、それはヒンドゥー教徒として肉食や殺生を善しとしない立場をとっていたという宗教的理由からのみならず、インド医学に於いて説かれていた肉食の害や、獣肉食から人肉食へ移行する可能性なども考慮してのことであった。また、ヒンドゥー教徒でなくても、生き物の生命を奪って食べることへの嫌悪感が存在するであろうことも指摘している。そして、万が一、屠殺をする場合でも、せめてその方法に正しい留意を置くべきだと述べている⁸⁵。インド医学の学術的な知見を根拠のひとつに置いたオズワルドの態度は、動物福祉のひとつの源流といえるかもしれない。

ジェニンズは、「神意によって、苦痛を与えられて死に至るまでが長引いた場合は、動物の肉は変質しماずくなるようにつくられている」と述べている⁸⁶。ジェニンズの場合は経験則と神意に原因を求めてはいるものの、人間の利益の為の動物への配慮の必要性を示しているという点に於いて、動物福祉の考え方に近いと考えられる。

ちなみに、実際に屠殺が肉質に及ぼす影響にかんする科学的見解は種々報告されている⁸⁷。食肉の是非はともかくとして、これらの結果から、畜産動物のストレスを軽減し、より苦痛の少ない方法で屠殺を行うことは、人間の求める肉質の向上にも合致していることが示されており、動物福祉の観点からみた場合は好ましいものだといえるだろう。しかしまた、農業・食品産業技術総合研究機構畜産草地研究所の「畜産草地研究成果情報」第七巻には、交感神経系の -アドレナリン受容体作動薬の飼料への添加による、山羊の脂肪蓄積抑制とタンパク質蓄積増加、また、ラットの末梢組織でのグルコース取り込み速度の上昇が報告されている⁸⁸。これは例えば、韓国の犬肉工場に於ける屠殺前に犬に虐待を加えることによって味を高めるという伝統を「アドレナリンが豊富な肉はおいしい」という点に於いてのみ裏付けかねないものであるともいえる。このことは、倫理への自然科学の介入、モラルの世界にエコロジカルな領域のあり方を直接導入すること⁸⁹の限界を改めて示唆しているように思える。

おわりに

節でふりかえった18世紀の議論を経て、19世紀には本格的に動物愛護運動が興った。

『動物の権利』の著者・ソールトを通じて、動物への道徳的配慮は、その対象を厳密には家畜動物に限ったものではあったが、イギリスでの対動物思想の主流となっていく。1822年には、イギリス法上で初めての動物法である「マーティン法」が制定され、1876年には

生体解剖も法的規制を受けるように取り決められた。それを追って、ドイツ・フランスをはじめとするヨーロッパ各地でも動物愛護協会が設立された。⁹⁰

最後に、「はじめに」で述べた本論文の目的に沿って、18 世紀の議論に於ける動物に対する見解と、現代の見解との関係を簡潔に整理すると、表 3-1 のようになる。

表 3-1

18 世紀の議論と現代の議論との共通要素
理性、言語、快苦の感覚といった動物のもつ特徴にかんする議論 動物に対する人間の「愛」を基にした議論 経験に基づいた解釈及び道德判断についての議論 東洋の宗教思想の引用（ディープ・エコロジー等に通ずる。）
18 世紀の議論の中に見出される現代の議論の雛型
快苦の感覚に重きを置いた議論 シンガーの功利主義の立場の雛型 人間の「愛」に基づいた議論 現代の動物の保護の雛型 経験に基づく議論 現代の動物の福祉の雛型
18 世紀の議論から汲むべき、現代に欠けている要素
宗教概念の利用 仲間の枠組みの再興 「愛」の価値の重視 芸術（文学・美術・音楽等）の応用

中でも「18 世紀の議論から汲むべき、現代に欠けている要素」について、先ず、何が欠けているかということに関して説明を加える。18 世紀の動物への道徳的配慮に関する議論の根底には、神や宗教の概念が存在していた。しかし現代に於いては、一部の領域を除いては、神や宗教の概念を用いた議論は行われていない。動物倫理の議論を呈示している多くの立場は、宗教を包含せずに成立している。同じく、神学に基づく議論から生じる「存在の連鎖」というスケール・モデルや、動物の魂(死後生)の有無という論点も、現代の議論に於いては見られないものである。

「大型類人猿 = 人間説」も、今では全く消えてしまった。現代では、それぞれの生物種の範疇は遺伝生物学的に明らかにされつつあり、人間中心主義であっても、人間非中心主義であっても、現生人類とほかの動物（例えば大型類人猿）をまったく同一の生物種としてみなすことはない。現在の多くの人間非中心主義論者が、人間と動物を仲間とみなす際に用いる根拠は、種の同一や類似などではなく、「同じ感覚をもつこと」「同じ共同体に属していること」「同じ いのち を有していること」などである。これは一見、世の流れがスピーシズム撤回の方向に進みつつあるということを示しているのかもしれないが、同時に「種差別は破棄するが、種差の存在は覆しようがない」「人間は如何にしても人間でしかありえない」という意識を際立たせてもいるように思える。

18 世紀の議論では、動物への人間の愛を包み隠さず述べている文章が多々見受けられた。同様に、現代の動物愛護の営みに於いては「愛」や「同情心」などがその基にあると考えられる為、「現代の議論との共通要素」及び「現代の議論の雛形」にも「愛」に基づいた議

論」という因子を盛り込んだ。しかし、基盤に「愛」があったとしても、とりわけ学術的な場に於いては、それを議論の核として用いている人は少ないということ、また、「愛」を前面に押し出している立場の多くが感情論に走っており論理的に成立し得ていないという現状を踏まえ、「18 世紀の議論から汲むべき、現代に欠けている要素」にも挙げた⁹¹。

ヤングは論文中で、ローレンス・スターン作の『トリストラム・シャンディー』の主人公トビーおじさんを賞賛しているが、この引用は、このような議論に於いて道徳的理念を提供する際の文学の大切な役割を示しているという点で特に興味深いとギャレットは述べている⁹²。また、ホワイトは、ナチュラリストとしての淡々とした科学的観察に終始しながらも、詩歌や挿絵を多用した芸術的香りすら漂うエッセイ文学として『セルボーンの博物誌』を著した。当世に於いて文学・絵画・芸術がもつ力を享受して議論を展開しようという試みは、芸術作品そのものやその影響についての研究でもない限り、皆無であるといえよう。

18 世紀イギリスに於ける動物に対する道徳的配慮の思想から得たものを、現代の議論にどのように生かすかということは、この「18 世紀の議論から汲むべき、現代に欠けている要素」すなわち 宗教概念の利用、 仲間の枠組みの再興、 「愛」の価値の重視、及び

芸術の応用から明らかにすることができる。例えば、 のように、人間と他の動物との関係を捉えなおすことは、どう転じても人間中心の枠組みから抜け出ないこと、また抜け出ないことを是としたり非としたりすることに終始している既存の価値観を、打破するきっかけとなるのではないだろうか。また、高橋(1996)が指摘した、エコロジカルな領域とモラルの領域をまったく同一のものとして対応させようとする論者たちの誤りを正すきっかけにもつながると考えられる。 の重視に依っては、その論者の議論が受け狙いからではなく本人の切実な心持から発生していることを示すことができるかもしれない。また、

は、一般の人々への議題提示にも有効である。但し、政治や思想運動に心ならずも利用された芸術家たちや、宗教の悲劇を鑑みると、その使用は慎重になされるべきであり、加えて個人の責任に於いて用いることが望ましいと思われる。そもそも の利用の際には、論者にそれらへの信頼が存在することが前提であろう。実のところ自然科学の信徒であり、宗教の価値など毛頭信じていないような者が、聴き手を謀る為に宗教を方便に用いるようなことはあってはならないと考える。勿論、 ~ 各々に於ける視点を 18 世紀にまで引き戻すべきだというわけではなく、現代の文脈、またそれぞれの地域の文化に即応したものとして、枠組みを作り直す必要がある。

今回は、主な対象を 18 世紀イギリスに限定したが、今後の議論に於いては、日本も含めた、他地域、他時代での動物の捉えられ方を整理していく必要がある。また、18 世紀の議論から得られた上記 4 つの視点について更に勘考し、自身の態度にも取り入れていくことが肝要であると考えられる。

Animal Rights and Souls in the Eighteenth Century	
CONTENTS	
Volume 1. ANIMAL LANGUAGE, ANIMAL PASSIONS AND ANIMAL MORALS	
<i>A Philosophical Amusement upon the Language of Beasts</i> (1739)	Guillaume Hyacinthe Bougeant
<i>Free Thoughts upon the Brute-Creation: or, An Examination of Father Bougeant's Philosophical Amusement, &c. In Two Letters to a Lady.</i> (1742-3)	John Hildrop
Chapter XVI. Of the society of Animals Chapter XVII. Of the Docility of Animals Chapter XVIII. Of the Characters of Animals Chapter XIX. Of the Principle of Imitation Chapter XXII. Of the Progressive Scale or Chain of Beings in the Universe from <i>The Philosophy of Natural History</i> , 2 vols. (1790-99) Vol.1, pp.414-72, 520-26	
	William Smellie
Volume 2. AN ESSAY ON THE FUTURE LIFE OF BRUTES	
Introduced with Observations upon Evil, its Nature and Origin, 2 vols. In 1 (1768)	
	Richard Dean
Volume 3.	
A DISSERTATION ON THE DUTY OF MERCY AND SIN OF CRUELTY TO BRUTE ANIMALS	
	(1776) Humphry Primatt
Volume 4. THE CHAIN OF BEING AND THE CRY OF NATURE	
'Against Barbarity to Animals' in <i>Guardian</i> , no.61 (21 May 1713), pp.260-67	Alexander Pope
'On the Chain of Universal Being' and 'On Cruelty to Inferior Animals' in <i>Disquisitions on Several Subjects</i> (1782), in <i>Works</i> , 4 vols. (1790), vol.3, pp.179-95	Soame Jenyns
'On Natural Evils' and 'On Moral Evil' in <i>A Free Enquiry into the Nature and Origin of Evil</i> (1757), pp.45-120	Soame Jenyns
Review of Soame Jenyns, <i>A Free Enquiry into the Nature and Origin of Evil</i> (1757), In <i>The Works of Samuel Johnson</i> , 11 vols. (1825), vol. 6, pp.47-76	Samuel Johnson
The Cry of Nature; or, an Appeal to Mercy and to Justice, on behalf of the Persecuted Animals (1791) John Oswald	
Volume 5. AN ESSAY ON HUMANITY TO ANIMALS (1798)	
	Thomas Young
Volume 6. LORD MONBODDO, ORANGUTANS AND THE ORIGINS OF HUMAN NATURE	
Introduction and Chapter 1-6 in <i>Of the Origin and Progress of Language</i> , 6vols., 2 nd ed. (1774)	
Vol.1, Book II, pp.207-367	Lames Burnett, Lord Monboddo
Appendix, Chapter 3 in <i>Antient Metaphysics</i> , 6vols. (1779-99) vol.3, pp.335-78	
	James Burnett, Lord Monboddo
'Lord Monboddo to Sir John Pringle, 16 June 1773' in William Knight, <i>Lord Monboddo and Some of his Contemporaries</i> (1900), pp. 82-8	

注

- ¹ Iliff (2002). Responsibility (研究者の責任)を4つ目のRとして追加しようと提案する動きもある。
- ² 「動物倫理」が日本で全く論じられていない訳ではない。亀山(2005)は「倫理とはあくまでも人間のあいだのルールであり、倫理的主体はどこまでも人間に限られること」「自然や生命の価値について人間が論ずる場合、その表現いかんに関わらずその実質は人間にとっての価値でしかないこと」を踏まえ、「動物倫理とは、動物と人間のあいだの規範ではなく、動物に対する人間の関わり方についての、人間のあいだの倫理的規範であって、その内容は人間の普遍的利害にもとづくものである。動物はもっぱら人間倫理の都合による配慮を一方的に受ける存在でしかない」と述べ、独自の動物倫理の規定を試みている。

- ³ <http://animaethics.blogspot.com/> (2006/11/22 閲覧)
- ⁴ <http://www.animaethics.org.uk/> (2006/11/22 閲覧)
- ⁵ 高橋(1996)は、「エコロジカルな領域をモラルの世界で覆うことも、モラルの世界にエコロジカルな領域のあり方を直接移すこともともに正しくない」と述べている。(pp.34-35)
- ⁶ 中野ら(1988)『実験動物入門』1.序論 1.3 動物実験の倫理 pp.17-25
- ⁷ 飼育動物(犬・猫・馬・小鳥等)を、一方向な愛情の対象であるペットとしてではなく、心を通じ合う仲間として捉える呼称。日本語では伴侶動物と訳される。
- ⁸ 今村(2000)『へそ曲がり獣医さんの動物福祉論』
- ⁹ <http://www.wspa-international.org/> WSPA のホームページ (2006/11/23 閲覧)
- ¹⁰ 中野ら(1988)『実験動物入門』1.序論 1.3 動物実験の倫理 pp.17-25
- ¹¹ <http://www.fawc.org.uk/> FAWC のホームページ (2006/11/23 閲覧)
- ¹² 今村(2000)p.1、pp.9-10、及び今村(2000-2006)「へそ曲がり獣医のホームページ」より
- ¹³ ソールトの議論については、ナッシュ(1999)『自然の権利』第一章「自然権」から「自然の権利へ」pp.86-98 を参照した。
- ¹⁴ レーガン(1995)は、主体性ある生命としての自己意識をもつ動物のみが権利を持つとし、原則的に一歳以上の哺乳類だけに権利を認めているようである。それ以外の動物の権利の擁護にかんしては、判断を保留している感がある。
- ¹⁵ レーガン(1986) 戸田清訳「動物の権利」、及び、レーガン(1995) 青木玲訳「動物の権利の擁護論」を参考にした。
- ¹⁶ この定義は、シンガー(1999)『実践の倫理』第四章「殺すことのどこが不正なのか」に依拠した。
- ¹⁷ レーガン(1995) pp.37-39
- ¹⁸ シンガー著『動物の権利』『動物の解放』訳者の戸田清は、『動物の解放』訳者あとがきで「植物の種の生命を奪うことは、倫理的配慮の対象外におかれることなのであろうか。エコロジーの立場からいえば、植物の個体はともかくとして、植物の種については、倫理(環境倫理)的考察の対象となるはずである。(p.342)」と疑問を投げかけている。
- ¹⁹ キャリコット(1995) pp.63-68、pp.70-72
- ²⁰ この分け方に対して、岡本(2002)は、シンガーの議論は種ではなく「苦痛を感じる能力のない動物」「苦痛を感じる能力がある動物」「自己意識を持つ知性的な動物」というクラスによって区別した「クラス差別主義」であって、種差別主義と原理的な違いはないと批判している。
- ²¹ キャリコット(1995) 千葉香代子訳「動物解放論争 三極対立構造」を参考にまとめた。
- ²² レオポルドの土地倫理に於ける生命圏共同体には、古来よりの人間の文化的営みも含まれているようである。『野生のうたが聞こえる』に於いて、野生の事物との接触を追体験させてくれるスポーツ、慣習、行為としての狩猟は、倫理的な抑制を伴い、節度を保ち、スポーツマンシップにのっとっているならば、文化的価値が認められるという見解が述べられている。(レオポルド(1997) pp.277-293)
- ²³ レオポルド(1995)。
- ²⁴ レーガン(1995) pp.34-35
- ²⁵ 鬼頭(1995)は、今までの動物倫理の議論は、近代的個人概念に則って動物に一定の権利を認めようという立場と、その概念を越えて全体論的に生命圏共同体自体を倫理の対象としようという立場の二極に分かれていたと分析し、この対立図式のなかへ新たな第三の立場を提示したのが、テイラーの生命中心主義であると指摘している。
- ²⁶ トマス(1989)『人間と自然界』第一章 人間の優越性 第一節 神学的根拠
シンガー(1988)『動物の解放』第五章 人間による支配
パスモア(1979) pp.24-28
- ²⁷ トマス(1989) pp.222-223
- ²⁸ トマス(1989)『人間と自然界』第一章 人間の優越性 第二節 自然界の制服
- ²⁹ トマス(1989) p.80

- ³⁰ 草食動物は食べてよいとされ、肉食動物の肉は不潔だとして忌避されていた。(トマス(1989)p.71)
- ³¹ 馴化された動物と野生の動物との二分法は、しばしば、文明社会と未開社会との二分法に例えられた(リトヴォ(2001) pp.9-10)。
- ³² トマス(1989) pp.70-77
- ³³ リトヴォ(2001) p.30、トマス(1989) pp.80-86、『人間と自然界』第一章 人間の優越性 第五節 劣った人間
- ³⁴ トマス(1989) pp.36-38
- ³⁵ シンガー(1988) pp.249-250、トマス(1989) pp.38-41、パスモア(1979) pp.30-32
- ³⁶ バナール(1967) p.262、pp.285-290、pp.308-309
- ³⁷ トマス(1989) pp.159-160、p.174
- ³⁸ トマス(1989) p.29
- ³⁹ トマス(1989)『人間と自然界』第三章 人間と動物 第三節 崩れる隔壁
- ⁴⁰ パスモア(1979) pp.33-36
- ⁴¹ トマス(1989) pp.92-94
- ⁴² ジェニンスによると、この世に存在するものは全て、「土くれ」から「人類」まで、途切れることなく繋がっており、この繋がりが「存在の連鎖」だとされている。(Jenyns, S. (1782) p.183)
- ⁴³ トマス(1989) pp.63-65、pp.131-132、pp.139-140、pp.184-186、p.281
- ⁴⁴ トマス(1989) p.262、p.275
- ⁴⁵ トマス(1989) pp.63-64、pp.198-199、pp.276-277、pp.281-285、pp.416-417
- ⁴⁶ Bentham, J. (1789) Chapter XVII. Section1-1. pp.310-311
- ⁴⁷ トマス(1989) pp.259-272
- ⁴⁸ Father Bougeant, G. H. (1739)
- ⁴⁹ Garrett, A. (2000) pp.xvi-xvii
- ⁵⁰ Oswald, J. (1791) pp.64-65
- ⁵¹ 人間を、神のスチュワード(受託者)とし、自然の全体に及ぶ支配権をもつとする考え方。神が人間に対してふるまうのと同様に、人間は下等な被造物との関係に於いては責任を負う仕方であるとする。(パスモア, J. (1979)『自然に対する人間の責任』第二章 スチュワード精神と自然への協力 pp.48-71 を参照。)
- ⁵² ラヴジョイ, A.O.著 内藤健二訳 / 晶文全書『存在の大いなる連鎖』(1979) pp.191-219
- ⁵³ トマス(1989) p.20
- ⁵⁴ トマス(1989) p.294、シンガー、P. (1988) p.254、pp.260-261、p.263
- ⁵⁵ Oswald, J. (1791) pp.1-2、p.9
- ⁵⁶ Bentham, J. (1789) Chapter XVII. Section1-1. p.310
- ⁵⁷ 人間と自然との関係を根本的に問い直すことで、今の文明の在り方をラディカルに変えていこうという思想運動。1973 年、ノルウェーの哲学者アルネ・ネスが提唱した。それまでに存在した人間の利益の為に環境保全活動を「浅いエコロジー」とあり、環境問題を生み出した根本原因にまで遡って事態に対処する「深いエコロジー」が必要だという主張である。(森岡(1994) pp.76-89) Eco Centrist(生態系中心主義)の急進派であるといえる。
- ⁵⁸ グーハ(1995) pp.84-87
- ⁵⁹ Father Bougeant, G. H. (1739) pp.32-33
- ⁶⁰ Hildrop, J. (1742-1743) , pp.64-65
- ⁶¹ ヒューム(1948) 第一篇 知性に就いて 第三部 十六節 動物の理知に就いて pp.270-275、ヒューム(1951) 第二篇 情緒に就いて 第一部 十二節 動物の自負と自卑に就いて pp.80-84、ヒューム(1951) 第三部 九節 直接情緒に就いて p.249
- ⁶² ホワイト, G. (1992) 第 14 信 優しい愛情と恐ろしい倒錯 pp.218-221
- ⁶³ Father Bougeant, G. H. (1739) II. Of the Necessity of a Language between *Beasts*. pp.27-41、III. Of the Language of *BEASTS*. pp.41-66

- ⁶⁴ Hildrop, J. (1742-1743) , pp.41-42
- ⁶⁵ ホワイト, G. (1992) 第 43 信 鳥たちの鳴き声 pp.326-331
- ⁶⁶ Lord Monboddo (1774)
- ⁶⁷ 神田橋(2006)は、「概念言語」を、体験、五感、身体内部感覚等の制御を外れたものと定義している。また、それ以前のコミュニケーションの為だけの音声や身振りは、「鳴き声言語」だとしている。
- ⁶⁸ ミズン(1998) pp.35-36、 pp.145-149、 pp.184-191、 神田橋(2006) pp.7-26
- ⁶⁹ ミズン, S. (1998) pp.114-118、 p.146、 シンガー, P. (1999) pp.134-136、
- ⁷⁰ Father Bougeant, G. H. (1739) p.66
- ⁷¹ Hildrop, J. (1742-1743) , p.55
- ⁷² Father Bougeant, G. H. (1739) pp.32-33
- ⁷³ Hildrop, J. (1742-1743) , p.4
- ⁷⁴ ヒューム(1951) 第二篇 情緒に就いて 第二部 十二節 動物の愛情と憎悪とに就いて pp.180-182
- ⁷⁵ Jenyns, S. (1782) pp.180-183
- ⁷⁶ ルソー(2005)「人間不平等起源論」 p.26、 pp.49-50
- ⁷⁷ ホワイト, G. (1992) 第 56 信 本能について pp.323-366
- ⁷⁸ ルソー(2005)「人間不平等起源論」 pp.165-172
- ⁷⁹ Father Bougeant, G. H. (1739) p.6
- ⁸⁰ Father Bougeant, G. H. (1739) pp.16-20
- ⁸¹ Hildrop, J. (1742-1743) , p.34、 Garrett, A. (2000) pp.xviii-xix、 トマス(1989) p.205、 ナッシュ (1999) pp.75-76
- ⁸² ライプニッツ(2005)「モナドロジー」73 節 p.28
- ⁸³ ルソー(2005)「人間不平等起源論」 p.29
- ⁸⁴ Jenyns, S. (1757) p.63、 p.103、 p.110、 pp.119-120
- ⁸⁵ Oswald, J. (1791) pp.73-75
- ⁸⁶ Jenyns, S. (1790) p.190
- ⁸⁷ <http://www3.famille.ne.jp/~marufeed/Shiyo/Broiler/BroilerMeat.htm>
- ⁸⁸ <http://ss.niai.affrc.go.jp/SEIKA/animal/07/0705/0705.htm>
- ⁸⁹ 高橋(1996) pp.34-35
- ⁹⁰ ナッシュ(1999) pp.86-98
- ⁹¹ 「生命への愛」を基盤に据えた生命倫理を展開している Macer. D. R. J.は、現代の議論への愛の導入を試みている稀有な論者である。
- ⁹² Garrett, A. (2000) pp.xxi-xxii、 p.xxv

参考文献

- Bentham, J.** (1789) *The Principles of Morals and Legislation*. London: Printed for T. Payne (Republished 1988. New York. Prometheus Books)
- Oswald, J.** (1791). *The Cry of Nature; or, an Appeal to Mercy and to Justice, on Behalf of the Persecuted Animals*. London: Printed for J. Johnson
- Father Bougeant, G. H.** (1739). *Philosophical Amusement upon the Language of Beasts*. London: Printed for T. Cooper. (Original work published 1737.)
- Garrett, A.** (2000). Introduction. In A. Garrett (ed.), *Animal Rights and Souls in the Eighteenth Century*. Boston: Thoemmes Press
- Hildrop, J.** (1742-1743). Free Thoughts upon the Brute-Creation: or, An Examination of Father Bougeant's Philosophical Amusement, &c. In *Two Letters to a Lady*. London
- Iliff, S. A.** (2002). Remembering the Animals. *ILAR journal*. 43. 38-47

Jenyns, S. (1782). On the Chain of Universal Being. In *Disquisitions on Several Subjects*. London: Printed for J. Dodsley

Jenyns, S. (1790). On Cruelty to Inferior Animals. In *Works*, 4 vols. (Vol.3). London: Printed for T. Cadell

Jenyns, S. (1757). On Moral Evils. In *A Free Enquiry into the Nature and Origin of Evil*. London: Printed for R. and J. Dodsley

Jenyns, S. (1757). On Natural Evils. In *A Free Enquiry into the Nature and Origin of Evil*. London: Printed for R. and J. Dodsley

Lord Monboddo, Burnett, J. (1774) Introduction and Chapter 1-6 In *Of the Origin and Progress of Language*, 6 vols., 2nd ed.

Macer, D.R.J. (1998) *Bioethics is Love of Life An Alternative Textbook*. Christchurch: Eubios Ethics Institute

Oswald, J. Father Bougeant, G. H. Hildrop, J. Jenyns, S. Lord Monboddo の論文は、Garrett, A. が編集した論集 *Animal Rights and Souls in the Eighteenth Century*. (2000) の中に写真製版にて採録されているものを用いた。論文集の目次は本稿末尾参照のこと。

今村英成 (2000) 『へそ曲がり獣医さんの動物福祉論』 株式会社アニメック

岡本裕一郎 (2002) 『異議あり! 生命・環境倫理』 ナカニシヤ出版

亀山純生 (2005) 『環境倫理と風土 日本の自然観の現代化の視座』 大月書店

神田橋條治 (2006) 『古希記念「現場からの治療論」という物語』 岩崎学術出版会

鬼頭秀一 (1995) 「第1部環境と倫理 解説」(小原秀雄監修 『環境思想の系譜3 環境思想の多様な展開』 東海大学出版会、pp.8-20)

鬼頭秀一 (1996) 『自然保護を問いなおす 環境倫理とネットワーク』 ちくま新書 筑摩書房

キャリコット、J. B. (1995) 「動物解放論争 三極対立構造」 千葉香代子訳 (小原秀雄監修 『環境思想の系譜3 環境思想の多様な展開』 東海大学出版会、pp.45-80)

グーハ、R. (1995) 「ラディカルなアメリカの環境主義と原生自然の保存 第三世界からの批判」 浜谷喜美子訳 (小原秀雄監修 『環境思想の系譜3 環境思想の多様な展開』 東海大学出版会、pp.81-91)

シンガー、P. (1986) 「プロローグ・倫理学と新しい動物解放運動」(シンガー、P. 編 『動物の権利』 戸田清訳 技術と人間、pp.17-31)

シンガー、P. (1988) 『動物の解放』 戸田清訳 技術と人間

シンガー、P. (1999) 『実践の倫理』[新版] 山内友三郎・塚崎智監訳 昭和堂

高橋隆雄 (1996) 「糸の先にあるもの 環境倫理について」『文学部論叢』50号:23-38 熊本大学文学会発行

テイラー、P. (1995) 「生命中心主義的な自然観」松丸久美訳 (小原秀雄監修 『環境思想の系譜3 環境思想の多様な展開』 東海大学出版会、pp.92-95)

トマス、K. (1989) 『人間と自然界 近代イギリスにおける自然観の変遷』 山内昶監訳 法政大学出版局

- 中野健司監修 (1988) 『実験動物入門 初めて動物実験を行う人のために』 川島書店
- ナッシュ、R. F. (1999) 『自然の権利 環境倫理の文明史』 松野弘訳 ちくま学芸文庫 筑摩書房
- パスモア、J. (1979) 『自然に対する人間の責任』 間瀬啓允訳 岩波現代選書 岩波書店
- パナール、J. D. (1967) 『歴史における科学 近代科学の誕生と発展』 鎮目恭夫訳 みすず書房
- ヒューム、D. (1948) 『人性論(一)第一篇 知性に就いて(上)』 大槻春彦訳 岩波文庫 岩波書店
- ヒューム、D. (1951) 『人性論(三)第二篇 情緒に就いて』 大槻春彦訳 岩波文庫 岩波書店
- ホワイト、G. (1992) 『セルボーンの博物誌』 山内義雄訳 講談社学術文庫 講談社
- ミズン、S. (1998) 『心の先史時代』 松浦俊輔・牧野美佐緒訳 青土社
- 森岡正博 (1994) 『生命観を問いなおす エコロジーから脳死まで』 ちくま新書 筑摩書房
- ライブニッツ、G. W. (2005) 『モノドロジー』 清水富雄・竹田篤司訳 (清水富雄・竹田篤司・飯塚勝久 訳 『モノドロジー 形而上学叙説』 中公クラシックス 中央公論社)
- ラヴジョイ、A. O. (1975) 『存在の大きい連鎖』 内藤健二訳 晶文全書 晶文社
- リトヴォ、H. (2001) 『階級としての動物 ヴィクトリア時代の英国人と動物たち』 三好みゆき訳 国文社
- ルソー、J. J. (2005) 『人間不平等起源論』 小林善彦訳 (小林善彦・井上幸治訳 『人間不平等起源論 社会契約論』 中公クラシックス 中央公論社)
- レーガン、T. (1986) 『動物の権利』 (シンガー、P. 編 『動物の権利』 戸田清訳 技術と人間、pp.35-56)
- レーガン、T. (1995) 『動物の権利の擁護論』 青木玲訳 (小原秀雄監修 『環境思想の系譜 3 環境思想の多様な展開』 東海大学出版会、pp.21-44)
- レオポルド、A. (1995) 『自然保護 全体として保護するのか、それとも部分的に保護するのか』 鈴木昭彦訳 (小原秀雄監修 『環境思想の系譜 3 環境思想の多様な展開』 東海大学出版会、pp.45-58)
- レオポルド、A. (1997) 『野生のうたが聞こえる』 新島義昭訳 講談社学術文庫 講談社

【参照 Web Site】

- Burgess-Jackson, K. et al Animal Ethics <http://animalethics.blogspot.com/> (2006/11/22 閲覧)
- FAWC (Farm Animal Welfare Council) <http://www.fawc.org.uk/> (2006/11/23 閲覧)
- Panaman, B. Brute Ethics <http://www.animaethics.org.uk/> (2006/11/22 閲覧)
- WSPA International (World Society for the Protection of Animals)
<http://www.wspa-international.org/> (2006/11/23 閲覧)
- 稲嶺盛晋 丸紅飼料 飼養情報
<http://www3.famille.ne.jp/~marufeed/Shiyo/shiyoindex.htm> (2007/01/02 閲覧)
- 今村英成 ヘソ曲がり獣医のホームページ
<http://www4.ocn.ne.jp/~animals/index-32.html> (2006/12/16 閲覧)
- 独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 畜産草地研究所
<http://www.naro.affrc.go.jp/> (2007/01/02 閲覧)